

生徒の実態を的確に把握する授業の工夫

～生徒が主体的となって学ぶ授業づくりを目指して～

南ヶ丘中学校 研究主任 松本 将史

1 授業改善の視点

授業振り返り表より

- ・ 机列表を持って実態把握に努めている
（課題が把握できているか。追究方法は理解できているか。）

2 具体的な実践

（1）教師がしゃべりすぎない指導

単位時間において「考えさせる場面」では、生徒が発見・解決するまで、簡単には答えを出さない姿勢で授業に臨むことが必要である。

理科では、「200gの物質が水に浮いているときの浮力を求める問題」では、2Nと答えを書けているだけでは○としません。以下は生徒とのやりとり。

A：「2Nです」
T：「Aさん、なぜですか？」
A：「200gのものが水にういているから、100gが1Nだから2Nだと思います。」
T：「100gが1Nなのはいいけど、なんで2Nなのかな…浮力を求める問題なのに、なぜ2Nにしたの？」

その後みんなの反応をうかがいながら図を書き、力の様子を図示するように指示した。

- ①教師が根拠を問う発問をし、生徒に根拠を表現させていくこと。
- ②ノートに書かせることで、生徒が理解しているかを把握すること。

上記の①②のように、教師が答えを出すのではなく、生徒が理解しているかどうかを把握できるような手立てを大切にしている。

[生徒の授業風景]



（2）評価を伝える工夫

①教師が評価規準を明確にし、生徒に伝えること。

今日の授業では「○○ができればB」「できなければC」という評価規準を明確に示すことで、机間指導の際「Bです」「Cです」という評価を生徒に伝えることができるようになる。

評価を伝えられた生徒は「自分には何が足りないのだろう」と考え、更に主体的に追究をはじめようになった。

②「できている」という評価を生徒に伝えること。

評価規準に達している生徒に評価を伝えることが大切だと考えている。

「○○さんの△△な姿勢が素晴らしい」など、評価を伝えられることで評価された生徒の自信になり、また他の生徒に対しての行動目標を示すことができる。

3 実践を振り返って考えられること

- 具体的に生徒の実態を把握する授業に心がけることで、一人一人の生徒のつまづきが少しずつ見られるようになった。また、評価規準に達している生徒を価値付け、認めてあげることが生徒の学ぶ意欲にもつながっている。
- 評価規準についてのみの評価ではなく、「姿勢」「仲間とのかかわり方」「声の大きさ」「話の聞き方」など、様々な場面で評価を伝えることで、学習環境が整ってくる。
- 生徒の実態を把握する授業に心がけることは、授業の中にとどまらない。学級経営や委員会活動に対しての指導、部活指導など、あらゆる面で生かされる。教師が誘導尋問的に教え込むのではなく、生徒に考えさせ、発見させ、乗り越えていく姿を求めることができるようになった。
- 生徒の実態を把握する力は、教員にとって大切な資質であると考えているが、教材研究のみで養える力ではない。普段の職員室の中や生活の中で、全職員が意識して実態を把握する力を鍛えていけるよう啓発する工夫が必要だと感じた。